



亡くなる1カ月ほど前、知人らと屋外に出て医療や宗教について語った=仙台市太白区、遺族提供

医師

岡部 健さん

おかべ・たけし

2012年9月27日死去（胃がん）62歳
2012年11月10日医療法人葬（告別式）

自分の家で最期を迎えたい患者の願いをかなえるため、医師や看護師らが一軒一軒を訪ね、体と心の痛みを和らげる。そんな医院をつくり、自らも仙台の自宅で息をひきとった。

東北大で肺がんを研究し、勤務医を経て1997年、仙台近くの宮城県名取市に岡部医院を開業した。一秒でも延命させようとする治療はせず、3千人近くを患者の家で看取った。

多くが亡くなる前に「先に死んだ家族らがお迎えに来た」と穏やかに話すのを見て、死と向き合うことでよりよく人生を終えられると悟る。東日本大震災の津波で亡くなった看護師を悼む僧侶らの誂経を聞き、残された人たちの心を静める宗教の力を改めて思い知った。

その体験から臨床宗教師の構想が生まれ、養成のための講座が昨年4月、東北大にできた。被災した人のそばに行き、そつと耳を傾ける。宮沢賢治の詩に

死と向き合い 宗教見つめ直す

出てくるような宗教者を育てる講座が置き土産になった。

飛行機嫌い。白衣は着ない。反発する医師はいるが、慕う人もまた多い。患者が呼ばばすぐ出かけ、仲間と飲めば明け方まで。だから長男の耕さん(29)には、正月でさえ一家だんらんの思い出がない。家族を顧みてもういたくて、思春期にぐれてみせたがダメだった。家のなかで朝すれ違っても、あいさつを交わさない親子になった。

そんな父に3年ほど前、がんが見つかり、最後の2週間を自宅で母とつききりで介護した。冷え切った父子のまま終わらなくなかったからだ。亡くなる3日前。夜明け前に肩を抱え小用に立たせ、大好きなたばこの後でベッドに戻すと、初めて父が「ありがとうございます」と礼を言った。「なに言ってるんだ」。わざと吐き捨て、自分の部屋に駆け込み、後は大声で泣いた。